［解説］

『陸奥日記』の位相

菱岡　憲司

小津久足は一般に、曲亭馬琴の友人、西荘文庫の主である蔵書家、小津桂窓として知られる。伊勢松坂の豪商で、通称は新蔵、のち与右衛門。文化元年（一八〇四）八月十二日生、安政五年（一八五八）十一月十三日没、享年五十五歳。その文事には、紀行・詠歌・蔵書・小説受容の四つの柱が見出され、それぞれの営みにおいて、卓越した到達を示している。

小津久足の紀行文は、文政五年（一八二二）十九歳の折の『吉野の山裏』から、没する二年前の『梅の下風』（安政三年）まで、浄書本で四十六点にものぼる。なかでも、複数冊をなす長編紀行『煙霞日記』（二巻二冊、天保八年〈一八三七〉）『ぬさぶくろ日記』（二巻二冊、天保九年）『浜木綿日記』（三巻三冊、天保十年）『陸奥日記』（三巻三冊、天保十一年）『青葉日記』（三巻三冊、天保十三年）『桜重日記』（二巻二冊、天保十四年）『志比日記』（三巻三冊、弘化元年〈一八四四〉）『海山日記』（二巻二冊、嘉永六年〈一八五三〉）は、いずれも質量ともに充実した近世紀行文学の傑作である。五十歳で執筆した『海山日記』以外は、三十代半ばから四十代初めの、気力体力ともに充実した、もっとも脂の乗った時期につづられている。そして『陸奥日記』[1]は、同時期の雄編群のなかでも、旅した場所といい、構成の妙といい、文体の洗練といい、いずれをとっても久足紀行文の白眉といえる。

近世紀行文学を専門とする板坂耀子は、『江戸の紀行文』（中公新書、二〇一一）において、「江戸時代の紀行の代表作は松尾芭蕉の『おくのほそ道』ではなく、初期の貝原益軒の『木曾路記』と中期の橘南谿の『東西遊記』、後期の小津久足の『陸奥日記』である」と述べる。『おくのほそ道』はもちろんのこと、『木曾路記』『東西遊記』とくらべても知名度の低い『陸奥日記』が、なぜ江戸時代の紀行の代表作といえるのか。板坂の見解を敷衍しつつ私にまとめれば、以下のようになる。

代表作とは、多くの共通点を持つ作品群のなかで、共有する特徴をいかして最高の到達度を示したものとの認識によるならば、『おくのほそ道』は名作ではあっても代表作とはいえない。なぜなら、江戸の紀行文を特徴づける「豊かな情報」「前向きな旅人像」「正確で明快な表現」という新たな評価軸に合致しないためである。『おくのほそ道』が中世までの伝統的な紀行文の中心をなす主情的な「旅

の愁い」に重きを置き、事実の改変さえも行って虚構的な文学世界を描いたことはよく知られる。しかし江戸時代には、従来の紀行文には見られない新たな潮流が生じている。それは、情の重視（主情）から知の重視（主知）への転換であり、それを決定づけたのは、『木曾路記』をはじめとした貝原益軒の紀行文に他ならない。その背景には、世情不安定な中世（憂き世）から泰平の近世（浮き世）へという時代の心性の推移や、参勤交代による街道の整備にともない、旅が憂いから解放され、娯楽としての旅が可能になるなどの環境変化が存在する。正確で豊富な地理的知識を重視して、憂いなく前向きに旅を記録するという近世紀行文の特徴を『東西遊記』『陸奥日記』も当然、備えている。

そのうえで特筆すべきは、『陸奥日記』は正確な事実の記載という主知を旨としつつも、旅先での見聞に触発されて歯に衣着せぬ「私」の心情を吐露する――すなわち中世的な「旅の愁い」に限定することない主情を描き得ていることである。「今古和漢雅俗一致」を標榜する久足は、中世までの主情と近世よりの主知という、新旧特徴をふたつながらに備えた紀行文を完成させた。江戸の紀行文の代表作たる所以である。

この度、『陸奥日記』がはじめて全文翻刻されることにより、文学・歴史学はもとより、国語学・民俗学・地理学など、多くの学問分野で活用されることを期待する。そして何より、久足が旅した土地に生まれ、育ち、日々の生活を営んできた方々の目に触れることを希望する。さまざまな理由で往時の姿が失われたとしても、その土地と、土地に根ざした人々の生活がかつて存在したことはまぎれもない事実であり、『陸奥日記』によって、かけがえのない土地の記憶と先人の息づかいを取りもどすことができると信じるからである。

注

（1）草稿・浄書ともに題名に振り仮名が振られていないため、読み方に決定的な証拠を得られないのだが、久足は書名の由来となる歌を、紀行中に詠込むことが多い。本作においても、書名への直接的な言及ではないものの、旅を終えて、「陸奥をめぐりこしまに時すぎて東の花はちりにけるかな」との歌を詠んでおり、音律よりムツではなくミチノクとの読みが確認できるため、『陸奥日記（みちのく）』と読むのが適切であろう。